

ワンポイント・ブックレビュー

鹿嶋 敬「雇用破壊 非正社員という生き方」(岩波書店 2005年)

景気に回復の兆しがみられ、2007年からの団塊の世代の斉定年退職を控え、企業の雇用ニーズには明るい兆しがみえはじめた。しかしながら、企業が新規の正社員採用を全般的に展開するとは言い難いようだ。企業による雇用管理は、1995年に日経連が発表した『新時代の「日本的経営」』による労働者の「長期蓄積能力活用型」「高度専門能力活用型」「雇用柔軟型」の3グループへの選別が進行し、正社員に対応する「長期蓄積能力活用型」が少数精鋭化する一方、他の2グループの活用が増えているからだ。さらに、著者によると、90年代後半以降、企業は、「・・・(総人件費)の圧縮こそが不況を克服し、人件費が安い東アジアとの市場での競争に打ち勝つ道なのだということを学んでしまった」。つまり、非正社員という生き方は、働く人の都合から、企業の経済的な要請に大きくシフトし、働く人にとっては生き方や価値観を左右する主要な問題となっている。

本書は、「左右、どちらを向いても非正社員時代」において雇用労働者約5000万人中1500万人が非正社員となった状況とその処遇の実態を明らかにし、「フリーターを生きる」3人の若者からの聞き取りを通してその生活実態と生活感に触れ、「新たな不安の種」として有期雇用や請負企業で働くことの不安定な将来見通しを描き出している。さらに、「流されて、いつか中高年」ではフリーターの中高年化の深刻な生活や財政上の問題に触れ、「なぜか、いつも、女性は非正社員」では、非正社員が性別役割分業と密接に結びついた関係にあることを明らかにしている。

著者は、若年フリーター、中高年男性フリーター、女性非正社員の3つの視点から近年進む非正社員の増大に伴う雇用の質の劣化に警鐘を鳴らしている。長年、新聞社に籍を置いていた著者だけに分析は分かりやすく、非正社員問題を全体的に俯瞰する上では大変有益な著書となっている。さらに、著者は、全ての労働者への仕事への意欲や能力による過度の評価に懸念を示し、「意欲や能力がなくても、ある程度努力すれば、そこそこ報われることこそが、人々がゆったり、のんびり暮らせる社会の基盤になる」という観点を大切にしながら深刻な問題であるにも関わらず非正社員という働き方の可能性に目配りを忘れず、数多くの調査データと聞き取り調査を通して事実を明らかにしている。

最後に、「新たなルールを求めて」において、働き方と生き方の両立の実現を目指した「働きに応じた公正処遇」、「法令遵守(コンプライアンス)」、「非正社員を含めたポジティブ・アクション」を提唱している。これらの解決策は、いずれも正社員と非正社員とに中立的な制度設計の必要性が強調されており、企業ばかりでなく、多くが正社員で構成される企業別労働組合にとっても非正社員問題が喫緊な課題であることを示している(H.I.)